

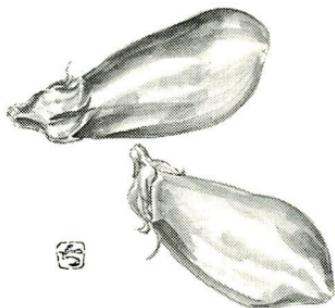
みめぐみの

第13部



みめぐみの

第13部



大谷光道著

目次

鬼が恐い人、	9
恐くない人、	2
『嫁おどし』	3
怨憎会苦	11
「姑おどしの面」は	13
あるか?	16
めでたし	19
氣になること	22
春の先駆け	26
お松明、御堂に	29
響きわたる声明	31
環境問題	31
読者の貢	31
あとがき	31

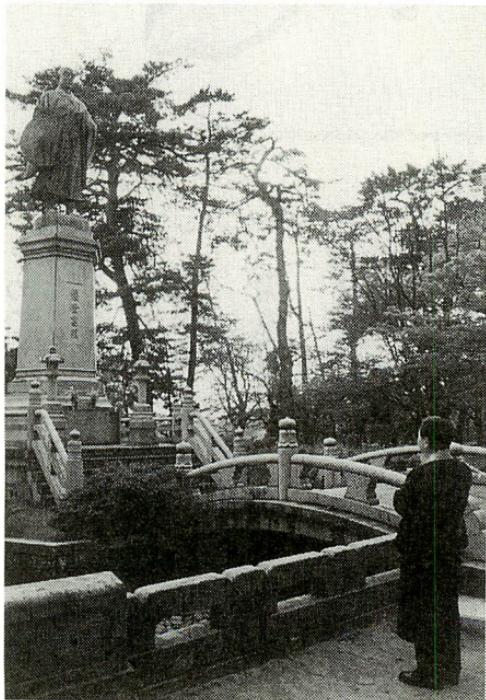
鬼が恐い人、 恐くない人

今年も蓮如上人御影の吉崎

(福井県坂井郡金津町吉崎)
かなづ

への御下向にお供をし、上人
のお陰で各地で多くの方々とご縁を結ぶことができました。

吉崎へ行けば必ずお参りするのが「お山」です。お山といつても小高い丘、
丘陵地といった感じで、かつて有名な吉崎の坊舎があつた場所です。あたり
一面、松と桜の木があり、高い石積みの上に旅姿の蓮如上人の銅像があります。
銅像の向いておられる方向に歩いていくと、北潟湖きたがたとその向こうに左か



ら延びる半島、そして外海……。なんともすばらしい景色が開けます。上人がこの地をお気に入りになつたわけは、この景色を見た者はだれでも納得できます。

ところで、吉崎といえば必ず思い出すのが、このお話です。

『嫁おどし』

昔、蓮如上人が吉崎においてになつた頃のこと、近くの十樂じゅうらくという村に与三次よそじと清きよという百姓の夫婦が住んでいた。与三次はもとは日山城の家臣で吉田源之進という武士だったが、日山城が没落したのち百姓となり十樂村に住むようになった。与三次は若くして妻・清を残し、先立つてしまつたのである。

清は夫の形見ともいえる二人の子供を大切に育てていたが、この子供たちにも先立たれてしまつて、老少不定ろうしょうふじょう（寿命は年令と関係がないこと）とはい

いながら、この世の無常を嫌というほど味わわされることになった。このことが契機となつて、清は蓮如上人のご教化に与り、無二の信者となつていたのである。さらに清が念佛の信者になるには、もう一つのご縁もあつた。それは、この家にけちで意地悪で嫉妬深いしゃうとうめ姑おばがいたからである。

婆さんはたつた一人残つた家族である嫁の清と仲よくするどころか、清をいじめる日々を送つていた。とりわけ、嫁がいつも夜になると吉崎へ参るのが腹立たしく、何とかしてそれを止めさせようと、手を替え品を替えして妨害するのだが、功を奏するものは一つもなかつた。一方清は、婆さんの世話をするし、家事はもとより百姓仕事もこなし、完璧で何一つ非の打ち所のない嫁で、婆さんはそれがなおさら腹が立つのであつた。

そこで婆さんは企たくらんだのである。「そうだ、いいものがある。あの面で鬼に化けて険しい山道で嫁を威おどしてやろう。そうすれば恐がつて、吉崎参りを止めるだろう。」と。

鬼が恐い人、恐くない人



図

それは文明四年（一四七二年）三月二十日の夜のことであつた。「夕飯のあとかたづけも済ませましたので、吉崎へ参りたいと思います。お母さま、よろしくお願ひいたします。」とたのむ嫁に、婆さんは「ああ、ゆつくり行つてらっしゃい。ご苦劳さん」と、その心とは裏腹の優しげな返事をして、嫁を送り出した。そこで婆さんは、侍であつた先祖より代々伝わる家宝の鬼の面を持ち出した。ばさばさの白髪をいつそうかき乱し、白の帷子かたびらを着て面をかぶつたところを鏡で見ると、自分でも恐くて震え上がるほどであつた。

月あかりを頼りに険しい近道をたどつて先回りして草木茂る小谷に潜んで、今か今かと清の通るのを待つた。そんなこととは知らない嫁の清は吉崎参りの嬉しさに胸を躍らせ、だれも通らぬ物騒ぶつそうな山道を一人急いでいた。

「私は上人さまのお陰でありがたいご信心をいただき、阿弥陀様に護られて、なんと幸せ者だろう、ナンマンダブ／＼。」と、吉崎を目指した。小谷にさしかかった頃、「吉崎などへ参ることはならん。どうしても参るという

なら、お前をかみ殺すぞ！」と、出た鬼のすごいこと。まことに恐ろしく身の毛の弥立つのを感じた。が、しかし、清は無二の念佛信者。流石に日頃の聴聞のしるしは明らかで、心を静め驚かず、「食マバ食メ 嘰ラワバ喰工金剛ノ他力ノ信ハヨモヤ食ムマジ。」と、歌にことよせ、「たとえこの身は鬼の餌食えじきとなろうとも、お慈悲を喜ぶこの心を、いかな鬼でもよもや歯が立つまい。ナンマンダブ／＼。」と、念佛を称えながらそこを通り抜けた。

効き目がなかつたことで慌てたのは、婆さんのほうだつた。急いでわが家へ走つて帰り、必死に面を取ろうとするのだが、顔にひつついて、無理に引つ張ると顔の皮が剥はがれるよう痛む。「今に嫁が帰つたら何と言ひ訳しよう。」と焦つてもがくのだが、どうしても面は取れない。「もうこれまで……。」と自害しようと一度は心を決めたものの、手足がしびれ、もはや身動きだにもできない。どうしようこうしようとうろたえているうちに、ついに嫁が帰ってきた。

清が家に入つて見れば、小谷で遇つた鬼がこんなところにいるではないか。

驚く嫁に婆さんは大声をあげ、「ああ、恥ずかしい、く。」と泣きながら、「清よ赦ゆるしておくれ。お前の前にいるのは鬼などではない、母なのだよ。実はこんな姿になつて、お前の吉崎参りを止めさせたいばかりに、私が悪い心を起こしてやつたこと。こんな罰ばちがあたつてしまつた。体がすくんで動けず、面が離れずこの始末」と。

これを聞いて嫁も涙を流して、「お母さま、勿体のうござります。悪いとお気が付かれただけで十分にうれしゅうございます。この私に謝つて下さるより、お念仏を称えてくださいませ。如何なる者をもお見捨てなき、大悲のお心におすがりくださいませ。」と、嫁の優しい言葉が、悪婆の心の底までしみわたり、言われるままに、恥ずかしいけどはじめての「南無阿弥陀仏」をただ一声稱えたところ、なんと不思議や。面はぱたりと落ち、手足のしびれも取れ、悪夢から醒めたようであつた。

嫁と姑は手を取り合つて喜んだ。外はもう夜も明け、二人共々朝のお参りに吉崎御坊へ。上人の御前に涙ながらに跪き、懇ろにご勧化をいただくのであつた。鬼も裸足のこの鬼婆も、遂に無二の信者となつたのである。

怨憎会苦

このお話——結論は「めでたし、めでたし」ですが——のように、嫌いな人と一緒にいなければならない苦しみのことを、「怨憎会苦」といいます。

さんざん苦労することを「四苦八苦」といいますね。これはもう、いまや日常用語になつていますが、もともとはお釈迦様がお説きになつた“苦”的内容です。「怨憎会苦」はこの八苦の中の一つです。

読んで字の如くで、「怨んやり憎んやりしている相手と会う苦」。特に難しい言葉ではありません。嫌いな人とはちよつと会うだけでも苦ですが、ここで「会う」は「会つている」つまり「一緒にいる」と読んだほうが「苦」の

意味がはつきりしてきます。

一日中生活の大事な部分をその人と一緒に過ごさんならんということになると、苦痛も尋常のものではありません。お説教でもよく出てくるのが、このお話のように嫁と姑の話。これはもう仲の悪いことの代名詞になってしまっているのか（笑）、仲のいい嫁姑にはめつたにお目にかかることができません。

一方男同士の場合はどうかというと、一緒に家にいてもあまり問題が起らないのはどうしてかということを考えてしまうのですが……。やはり女の方の場合、嫁と姑は台所をはじめ家事のためにはどうしても協力をしなければならんことがある。ところが、お料理一つをとってもね、それぞれ流儀が違う。今までにやつてきたやり方、味付けはもちろん、大根の切り方一つに至るまで、何もかも違う。流儀といえば、茶道とか華道で何々流とかいうのだところはこの作法が正しいと決まっているので、もめごと

は起こらないでしようけれども……。

こんなことは当事者になつたこともなければ、またなることもできない私が、わかつたようなことを言つては叱られます、皆さんのご経験から考えてみてください。あるいはもつと説得力のあるお話を聞かせていただけることになるかも知れません（笑）。

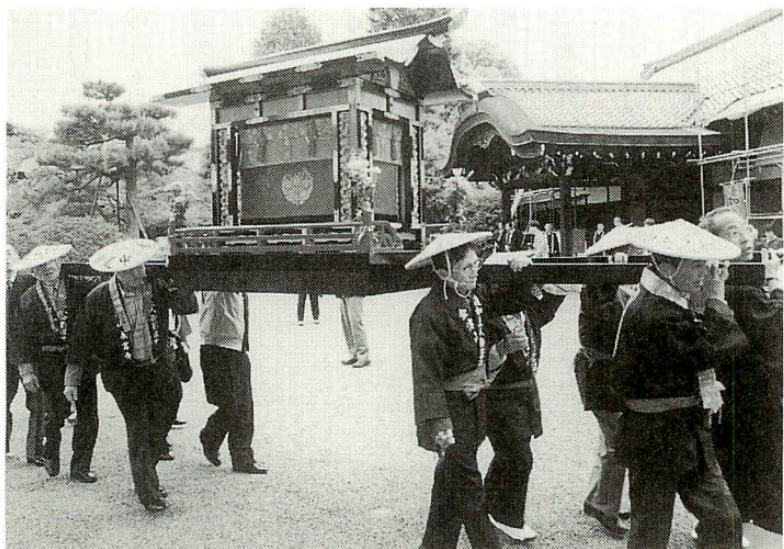
「姑おどしの面」はあるか？

ところでこの鬼の面、当時から五百数十年を経て今日に伝わつておりますが、一つでなくいくつもあるのをご存知ですか。私もはじめは一つしかないものだと勝手に思い込んでおりました。まあ、勝手にといつても、ふつうそうですよね、一つだと思いますよね。ということは、吉崎に嫁おどしがいくつもある、吉崎という所はそんなに恐いお婆さんがたくさんいるところか（笑）。そんなことを言うと吉崎の方々に叱られます。

それよりも最近思うのですが、
「姑おどしの面」というのは何故な
いのか、あつてもいいんじやないで
しょうか（笑）。

この間も他所^{よそ}で姑おどしの話をし
たら、よく受けましてね。今日より
もつと受けましたよ。そういえば私
の話を聞いてくださっていた方々の
平均年齢が、今日よりもつと高かつ
たからでしょうか（……大笑）。

こんなことを言つていると、姑お
どしの面も数が増えてしまうかもし
れませんね。しまいに私が嫁おどし



と姑おどしの両方からおどされることになりそ�です。今日の帰り道が危ない（笑）。

横道に入るのはこれくらいにして、五百数十年前の伝説が今日まで語り継がれてきたこと、このお面が吉崎の名物になつていることは、吉崎という所に一つのイメージを添えているといえます。また、伝説といいながら、年代がはつきりしていることや、その場所が「嫁威」^{よめおどし}という地名にまでなつて残つてゐるなど、とても「伝説」とはいい難い氣もします。

しかしもはや、伝説であるか実話であるかはどちらでもよく、蓮如上人のご教化がすばらしかつたことを伝える話であると共に、人間の真実が描かれているところがこのお話の何ともいえない魅力です。

めでたし

仏法に近づく、ご信心をいただいて念佛を称える身となるきつかけは、千

差万別です。

このお話の嫁・清の場合は、夫だけでなく一人の子供にまで先立たれました。このような「無常觀」から、つまり「この世のものは何一つ変化しないものはない」ということを身をもつて知ることで、常に変わらない存在（常住不^{じゅうふ}變）である阿弥陀様のお慈悲に包まれる喜びを見いだしていくといったことです。

また姑は、嫁が蓮如上人という、自分にとつてはわけのわからん人のところへ通っていることや、当時蓮如上人のところへは近所の人たちも参詣していたということもあって、自分が取り残されたのではないかという焦りもあり、「今さら参れるか。」という思いがあつたでしょう。嫁が上人に何を教わつてくるのか知らんけど、ふつうなら嫌がることでも楽しそうにこなすのを見て腹立たしかつたのだろうなどと、いろいろと想像できます。この姑のようには法に反抗したことがかえつて仏道に入る縁となることを「逆縁」とい

います。

他人の足を引っ張つて、自分と同列またはそれ以下にひきずりおろそうと
いう思い——妬み、嫉み——が働くのは私たち凡夫の常で、お面が取れなく
なつたからといって他人事として笑つてはいるわけにはいきません。

同様のお話として「板敷山の弁円」が思い出されます。ご心配なく、弁円
は男です(笑)。弁円は『御伝鈔(下巻第三段)』(覚如上人御作)に記され
る有名なお話ですが、また別の機会にお話します。

「怨憎会苦」についてもう一度見てみると、嫁の清は、蓮如上人のお導き
と清自身の信心の結果——ご利益——として姑を済すくい、同時に怨憎会苦から
も開放されました。またこれは姑にもいえることで、姑が嫁に抱いていた怨
みも憎しみも解消したわけです。「嫌いな人と一緒にいんならん。」という家
庭の苦しみもお念佛のご信心一つで、共に合掌のできる心の世界が開けてく
るということですね。阿弥陀様の大きなお智慧をいただくことによつて、そ

の視野で物事が見えてくるので、お互いのいたわり合いも譲り合いも自然に具わつてくるということですね。当たり前といつたら当たり前ですが、その当たり前に到達することが大切なんですね。

気になること

ところで、嫁おどしのお話の中で一つ気になることがあります。

清は鬼に威おどされても驚きの色を表わさず、お念仏を称えてそのままその場を通り過ぎました。まことに立派な念佛信者がありました。

しかし、ここで清が腰を抜かしていたとしたらどうでしょう。そういう清であれば、他力の念佛信者とはいえないのでしょうか。この辺が気になるところです。

これは我が事として心配になつてきます。

「もし、私が清であつたら、はたして同じように『南無阿弥陀仏』で

鬼の横を通り抜けられたであろうか。もし腰を抜かして立てなくなっていたとしたら、日頃から称えていたお念佛、阿弥陀様に合掌していた私は一体何だったのだろう。」と。

ご心配なく。腰を抜かしたあなた——ひょっとしたらこの私（笑）——も清に負けず立派な念佛信者に変わりありません。

何故このように立派な「念佛者」と、文字通り「腰抜け」の両方とも、念佛信者だといえるのでしょうか。

鬼を恐いと思うのは、やはり、「死にたくない。」「殺されるのは嫌だ。」という思いが心の底にあるからですね。「殺されてもかまわない。私の行くところはとつづくに阿弥陀様のお淨土と決まっているのだから。」と、ご信心が決まっているのであれば、「恐い」と思うことがそもそもおかしいわけです。ところが、ご信心が決まっているはずなのに「恐い」と思う。

こここのところをご開山親鸞聖人は、「煩惱がそゝさせてているのだ。」と仰いおっしゃ

ます。「恐いと思ひ腰が抜けることがなければ、煩惱がなくなつてしまつたのではないかと、かえつて心配になるよ。」とお説きになるでしょう。さらには「そもそも煩惱の具わつた凡夫を哀れんでの阿弥陀様のご本願なのだから、腰が抜けたくらいでお淨土へ行けなくなるわけなんかないよ。」と。

これで安心していただけたでしょうか。『歎異鈔（第九章）』を「腰抜かし版嫁おどし」にアレンジするところになります（『みめぐみの』第七部参照）。



春の先駆け

三月の初めに、東大寺に行きまして……。皆さん、東大寺ご存じですね、奈良の東大寺。何の話が始まるのかって……、むつかしいお顔をされますね。はじめは真宗の話と違うんですよ。

修学旅行とか遠足で奈良に行けば必ず東大寺に、大仏さんですねえ、お参りされますね。おそらく「行つたことない。」とおっしゃる方はおいでにならないと思います。

東大寺で「お水取り」という行事があり、長い冬の終わり、春の先駆けのニュースとして、毎年必ずテレビで放送されます。松明を持ってお御堂の欄らん

千のところを走る、そういう映像をいつもご覧になつてゐるかと思います。その東大寺のお水取り、正しくは「修二会」といいます。お正月の法要を修正会というのに対して、二月のお勤めなので修二会というわけです。

修二会は大仏さんではなくて、大仏殿の後ろのほうにある「二月堂」というお御堂に観音様がおいでになつて、その二月堂の——そして東大寺としても——一年で一番大事な法要です。われわれのところでいうと



報恩講といったところでしょうか。

東大寺の修二会に参詣したのは、「大谷声明研修会」の勉強の一環です。

大谷声明研修会というのは、今日もここに何人かお参りしていますが、お寺の特に若い人たち——僧侶の卵、ひよこ、そうでない人もいますが（笑）——を中心に声明の、お経といったほうがピンと来るでしょうか、お勤めですね、三日間ずつ年二回、私と一緒にお稽古をしております。三日間のうちの初日、三月一日に、東大寺の修二会の参拝・見学に行きました。他所のお勤めを聞かせていただくことによつて、自分たちの声明を深めていこうとう考え方によるもので、今までに天台宗、真言宗、日蓮宗から声明専門の講師にお越しいただいて、それぞれの宗旨の声明について講義を受け、実際にも声明を聞かせていただきました。

今回はいつもとは反対に私たちのほうが足を運んで、お話を聞き、法要にも参詣させていただくということになつたものです。

気温が零下になる年もあると聞き、古いラクダのシャツまで引っ張り出して、寒さに備えました。はじめに東大寺の声明、特に修二会のお勤めについて教学部長の狭川普文さがわふもん師から詳しいお話を伺い、二月堂まで案内していただきました。

お松明、御堂に響きわたる声明

「お松明」と呼ばれるこの行事が始まる七時に近づくにつれ、御堂の前の急傾斜の白洲（広場）は次第に参拝客——見物客？——で埋め尽くされています。テレビでしか見たことのなかつた「お松明」でしたが、現実に目前の欄干の上に姿を現すと、あまりの迫力にどうしてもテレビで見た映像と重ならず、別のものとしてしか目に映りません。その巨大な火の玉となつた松明が回転し、火の粉が飛び散るたびに、ドーッという喚声かんせいが上がります。この光景に酔い痴れること一時間、あつという間に過ぎてしまいました。

この後いよいよ法要に参詣です。さきのご説明を思い返しながら、二月堂の中へと入つて行きました。

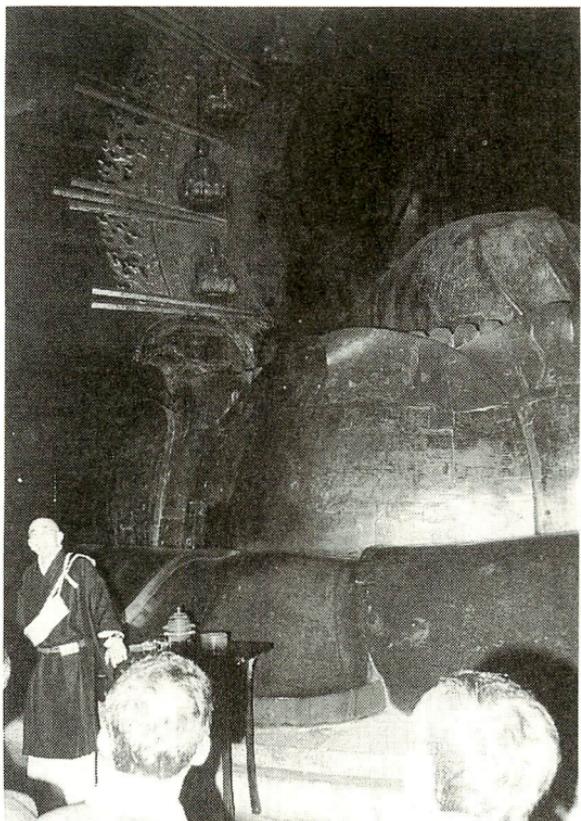
修二会は二月の終わり一週間の別火（準備段階）と三月の初め二週間の本行からなり、その間

寒さと空腹に耐え、

不眠不休に近い厳しい修行が続けられます。

そして、「練行衆」

といつて毎年選ばれる十一人の僧侶で構成されるチームで勤められます。この十



一人のチームワークがきわめて重要で、一人がちよつと気を緩めたために、本人はもちろん他の人に怪我をさせてしまうことにもなるそうです。それは「差懸」——という歯のない下駄のようなもので、私も見たことはあります——を履いて薄暗いお御堂の中を走り回る場面もあつたりするからです。体力と精神力の限界に挑戦するような修行であるだけに、危険も大きいのです。

練行衆の息が常に合っていないとお勤めがむちやくちやになつてしまふといふのも、お勤めを聞かせていただいていて、宗旨の違う私たちでも「だれか一人がひとこと間違えただけでもどうなるだろうか。」と思うような、きわどい掛け合いの部分が続きます。当然のことなので取り立てて言うのは失礼なのですが、声明の稽古の行き届いていることは、お腹の底から出る自信に満ちた声から体感することができました。

私はいつも大谷声明研修会で、「聞かせる声明」「聞いているだけでお念佛

の出てくるような声明」にならないといけないと、やかましく言つております。声明の内容はもちろん違いますが、私のいう声明の役割の重要性を身体で感じ、「まことにいいお手本に出会えた。」と、皆が喜んでくれました。

練行衆は修行中に本人の怪我や病気での入院はあつても、仮に親が亡くなつたとしても修二会が終わるまでは家に帰ることは許されない、という厳しい掟がある一方、「やつていると修行が楽しくなつてくる。年に一度これがないとたよりない。」という実感もさきのご説明にあつたのが印象的です。

その年の練行衆にあたつていなくて他の仕事に就いている人も、怪我人の出たときはピンチヒッターとして交替しなければならないという緊張感が修二会全体を支えているというお話も、実際に法要の行われている二月堂にいると、私たちにでも何となく感じられてくるものでした。

京都に帰る電車の時刻が迫つてくるので、法要の途中でしたが失礼して帰途につきました。

環境問題

修二会は、一二五〇年前（七五二年）に始められ、その後毎年一度も欠かすことなく行われてきたもので、正式には「十一面悔過」と言われ、十一面觀世音菩薩（十一面觀音）に懺悔する法要です。これを、「私たちが意識的にまた無意識的にも、あるいは不本意であつても、自然を害していることに対する『ごめんなさい。』と懺悔し、また、私たちが自然の恵みのおかげで生活させてもらっていることについて『ありがとう。』と感謝の気持ちを、觀音様に申し上げるための修行・法要です。」と、たいへんわかりやすく説明してくださいました。

また、最近何かにつけて顔を出す環境汚染について東大寺周辺の動物や植物の生態系の変化を例にとってお話くださったことが強く印象に残り、京都への電車の中で思い返していました。私自身、環境問題に対する関心が決し

て高くないことは、それまでにもぼんやりとは感じていたことでしたが、「私は自分自身と大自然とのかかわりを、信仰上どう考えてきたのか。」という疑問に突き当たりました。

浄土真宗ではこのあたりはどう考えたらいいのでしょうか。

これは言い訳になりますが、浄土真宗では、信心と念佛を強調するあまり、信心や念佛の深みや幅——信心や念佛のはたらき——に大きな意味があることを忘れ勝ちになる傾向があります。

しかし浄土真宗においても、信心——必ずお淨土に往生できると安堵し喜ぶ心——持てるようになると、その利益^{りやく}——結果、付録、おまけ——として、私たちは環境問題についてもしかるべき視点や姿勢を自然に持つようになることになっています。親鸞聖人はその御作『教行信証（信卷）』の中で、浄土真宗における現世利益（この世での利益）を十種類お示しになりました（『みめぐみの』第三部参照）。その十種の中に「知恩報徳の益^{ちおんほうとく}」^{やく}というのが

あります。これは「阿弥陀様の恩徳を感謝し、同時にすべてについて報恩と
いうことを忘れないようになる」ということです。「阿弥陀様に対するご恩報
謝にすべてが含まれる。」と言つてしまえばそれまでなのですが、阿弥陀様
に手を合わせさえすれば他を顧る必要がないということではないはずです。
あらゆるもの——人、衆生しゅじょう（生きとし生ける物）——に対して「ありがと
う。」という思いが起こつてくるのが、自然なお念佛のあり方でしよう。

東大寺は華嚴宗けいんしゅうといつて、『華厳經けいんきょう

』と いうお経を中心に行する宗旨です。『華厳經』の世界観が新鮮に感じられたとともに、私自身不明確であつた環境問題に対する視点を明確にしていただいたことがあります。

読者の貢

感想意見

大阪市西淀川区 太丸 操さん

この度、第十二部を知人からいただき読ませていただきました。年齢を重ね老い身になり最近「信心」について考える様になり、この度も「自信教人信」について、心に浸み入る思いがいたしました。仏教の言葉はなかなかむつかしく理解しにくいですが、やさしい言葉で嬉しく拝見いたしました。余生はお念佛を称えながら過ごします。

読者の貢

はじめまして、先日宗円寺にて参りまして目の前にて蓮如上人様御影像に私と

滋賀県長浜市 小泉 ヒロ子さん

てもアツキ感動しました。小学校三年生の時より正信偈を淨読します。朝三時目覚め念佛申します。

——中略——

この世に尊い命をもらいました。命の大しさを日本中にひろめて下さい。

命を殺すくらいニュース、一人でも明るい真実を。苦しいこの世、何故生きる。「後生ノ一大事」をつたえて下さいませ。

編集部注…一部割愛させて頂きました。

東京都江戸川区 松岡 忠男さん

昨日、本当に暗い話が多いですね。特に若い人々の思いもよらぬ犯罪が多発しています。正に末法の世ではないのかと思わざるをえません。

“人を信ずること”がこんなにも無意味になつたのでしょうか、信ずればこそ心の、物の出発があり、礎があるのだと思うのですが、“なぜ”という気持ちです。「信ずるべきもの」を創成する努力が肝要ですね！

あとがき

みめぐみの刊行委員会

一話目では、「姑の改心」にスポットが当たれがちなお話を、光道台下は「腰抜かし版……」として嫁にスポットを当てながら、親鸞聖人のお心にたどりつかせて下さり、ほつと安心いたしました。

「ご恩の中に生きている」「お念佛のお陰で、今ある自分を知らせて頂きました」と素直に喜べる生活のすがたを、この二話を通してつかみ取つて頂きたいと 思います。

また、「読者の頁」は紙面を通じた読者間の、そして著者との有意義な交流の場として活用していただくスペースです。皆様の投稿をお待ちしておりますので、是非ふるつてお寄せ下さい。

尚、去る五月三十日『みめぐみの』の発刊に大変ご尽力頂いていた常滑市光明寺・小林至ご住職が病魔にみまわれ、御家族の手厚い看護の甲斐もなく示寂されました。ここに紙面を借りて読者の皆様方にご報告すると共に、心からご生前のご尽力に感謝いたします。

みめぐみの 第13部

2001年7月5日 印刷
2001年7月10日 発行

定価 200円

著 者 大 谷 光 道

発 行 みめぐみの刊行委員会

〒600 京都市下京区烏丸通七条上ル常葉町754
-8167 本願寺寺務所内

TEL. 075(351)3555 FAX. 075(351)3120
振替口座 01060-5-56990

印 刷 (株) 中 外 日 報 社



みめくみの刊行委員会刊